
無能力と能力者

加羅紅里人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能力と能力者

【Nコード】

N 8 7 3 6 P

【作者名】

加羅紅里人

【あらすじ】

能力者が存在する世の中

能力者は特別視され、無能力者が蔑まれる世界

そんな世の中のとある学園——中立魔法学園は能力者と無能力者が一緒というちょっと変わった学園

この学園にいる十

剣士と無能力者と能力者の物語

プロローグ

能力者が存在する世界

能力者が特別視される世界

能力者と無能力者は分けられ、学校も能力者と無能力者が分けられていた。

ただ1つの学園を抜いては……

中立魔法学園——日本ではゆうつ能力者と無能力者が一緒に学園生活をする学園

ただし一緒といっても校舎は分けられている

それでも毎日、能力者も無能力者も同じ門を通るのだった。

午前8時

多くの生徒が登校する時間、門を通って右に曲がる生徒と左に曲がる生徒

この時点で既に能力者と無能力者が分けられている

この学園を上から見ると東と西に校舎があり、東側が旧校舎で西側が新校舎、もちろん新校舎に通うのは能力者の方だ

分けられるのは校舎だけでなく、食堂やグラウンド、それに図書館などもそうである

さて軽い前置きはこれくらいにしておいて物語に入りましょう

中立魔法学園で能力者と無能力の物語始まりです♪

中立魔法学園

今日も同じ校舎の同じ階段を上る

上りながら背伸びをしてまだ起きていない体に血を巡らせる

「んゝまだ眠いなあ」

寝ぼけ眼を擦りつつ自分の教室に入り、一ヶ月前にくじ引きで勝ち取った窓際の一番後ろの席に座る

鞆を机の横に掛け、携帯を開き適当にいじくっていると

「あつ、危ないー!!」

声のした方向を向こうとする前に顔面に何かが直撃した

「ぐほっ!!」

「ごめーん、つな君」

顔面に直撃した物はどうやら鞆だった。

「綾、いいかげんに鞆を投げて机の上に乗せるっていうわけのわからない挑戦はやめろ」

僕が綾と呼んだ少女は中岡 綾といって、高校入学時に知り合った子で、黒髪のポニーテールでかなり可愛いと男性陣からよく言われていて

その綾が呼んだつな君ことが十 剣士だ、ていうか僕自身だ

「えー、でも今日成功すれば、記念すべき10回目だったんだよ！？」

「僕は今日で顔面直撃回数が記念すべき20回目をむかえたよ………」

「記念すべき20回目おめでとう」

「鞆………捨てるよ」

窓の外に鞆をやりぶらぶらと揺らしてみる

「わぁー、ごめんなさい」

「分ければよろしい！」

うるつると今にも泣き出しそうな顔をする綾に鞆を返す

鞆を返すと綾は僕の前の席にこちら向き座る

「つな君、朝から携帯で何してんの？」

「別にただ時間を潰してるだけだよ」

また携帯に目をやるが、綾は携帯の画面を手で隠す

「目の前に人が来て、つな君の方を向いてるのに携帯を見てるのは

ダメだよ」

「何で？」

「こらこら、朝は話するのが決まりでしょ」

「そんな決まり初めて聞いたよ……」

なんやかんや言いつつも、結局は綾との話は盛り上がっていた

そしてその2人の話に少年が混ざる

「おいおい、朝からお熱いねー」

「そんなんじゃないよ」

「もうつな君、照れない照れない」

入ってきたの赤色の髪で燃え盛る炎の髪型をした少年は山神
で中学の頃からの知り合いだ
焰

「焰がこの時間に来るなんて珍しいな」

「おいおい、今日はあの日だぜ、あ・の・日」

「あの日？」

「もしかしてつな君忘れちゃったの!？」

「生理か？」

「俺は男だ！！」

2人とも同時に驚くが、その時ほんとに僕は忘れていた……………エー
スが帰ってくるということ

エース

中立魔法学園には僕や綾それに焰が通う普通科と能力者が通う魔法科の二つがある

むろんながら、普通科が旧校舎で、魔法科が新校舎だ

普通科と魔法科の違いは能力の有無や設備の違いのほかに関級という制度がある

魔法科の生徒達の中で優劣を決め、A、B、C、Dとあり、そのランクでクラスを分けられるというわけだ

つまりクラスは四クラスあるということ

だが……

魔法科のランクにはもう一つ存在する

それがエース、毎年ランクAの中から一人選ばれる存在で、魔法科にとってはとても名誉なことなのだ

エースに選ばれれば、学園からいろいろと優遇措置がもらえる

例えば授業料免除とか、通学にかかる費用を払ってくれたりもするが、なにより素晴らしいのは、学食のメニューを無料で食べられる

のだ

一見至れり尽くせりのように見えるエースだが、エースになるにはかなり難しいのだ

エースになるにはクラスAに入るのは当たり前なのだが、そもそもクラスAに入ること自体が難しい

現在の魔法科には1学年、200人が在籍していて、クラスAに入るのはたった10人という決まりがある

そのクラスAで選抜試験を何十回もやり、やっとのことでクラスAからエースを一人選ぶのだ

そんなエースが帰ってくるというのが今日という日だった

“帰ってくる”というのは文字通り帰ってくるのだ……仕事から

エースに選ばれた者は、月に一回のペースで仕事に行かなければならないのだ

仕事内容はよくは知らないが、少し危険なことをしたりすることもあるらしい

その仕事が何日間続くかは分からない

だが

とりあえずエースは今日帰ってくるのだった

窓から校門を見ると、校門の周りには多くの魔法科の生徒と先生達
がいた

「はあゝわざわざお出迎えとはご苦労なこつた」

わざと皮肉を込めた言い方をする焰

「いつにましても凄い人数だよな……女子が」

「まあしょうがないよ、エースがあれならね」

僕と綾の会話で、すでに分かっていると思うが、いちよエースを説明
するなら

文武両道！！才色兼備！！品行方正！！清廉潔白！！天真爛漫！！
一視同仁！！

のような感じで、魔法科のみならず、普通科の生徒（女子）からも
人気が高い

やがて校門の前に一台のリムジンが止まった

「はっ、リムジンとは随分だな」

「確かに、リムジンはやりすぎだな」

リムジンが到着したと同時に校門の周りからは黄色い声が飛び交っている

「はあ、一度でいいからあんな風に騒がれてみたいね」

「きっと一般人は一生ならなだろうね」

三人がどやかく騒いでる内に、リムジンの扉が開き、一人の少年が降りてくる

黒髪のみディウムでアシンメトリー、二重で目はぱっちりとりあえずイケメンだ

「我が学園のエース、伊場　隼君だよ」

伊場君はリムジンから降りると運転手に深々と礼をした後に校門にいるファン（生徒達）に軽く手を挙げると

ファン達がどつと沸いていた

「けっ、アイドルはほっというて座ろうぜ、先生も来るだろうからな」

エースを毛嫌いするように言った焰は自分の席に戻って行った

焰が席に座ると同時に担任の先生が入って来たのを確認した僕と綾も自分の席に座った

（伊場　隼か……）

入って来た担任は早速朝のホームルームを開始する、今日は報告することが多そうだ

「えーとまず……皆も知っている通りだけど、エースの伊場 隼君が帰って来てるから、会った時はきつちりと礼をするようにね」

伊場君が戻ってきたことに知らなかったクラスメイト達から、“きやー”とか“嬉しいー”などと、男子にとってはイラつく言葉が聞こえてきていた

「…………とまあ、連絡事項はこれくらいね、じゃあ今日も元気に、怪我をしないようにね、あと…………魔法科の子とはケンカしないだね」

最後の言葉には、本当に勘弁してくれというような感じが感じられた魔法科の生徒ともめ事起こすのは普通科の先生からしたら嫌なことなのだろう

最後の報告を終えると、先生が教室を出ていき、教室内にまた雑談の声が教室を包みこむ

「今日は伊場君が帰ってきたことで持ちきりになりそうだね、つな君」

「そうだけど、僕たちはあくまでも普通科の生徒だからあまり交流はないと思うけどね」

「まあまあ会ったらポジティブに考えようよ」

「どこをどうポジティブに考えんの？」

「うーむ……あ、会ったらメアド交換とか」

「フアンの子に殺されて戻ってくるな」

「うわーん、つな君酷いよ」

綾の嘔泣きの声で、クラスの男子が睨んできたけど、あえて見なかったことにした

数分後に一時間目の授業が始まり、今日という一日が始まった。

朝のぽかぽかした天気のおかげ、授業がつまらないせいかは知らないが、僕はうとうととしていた

「こらー十！！何寝てやがんだ」

「すいません……」

「許さん、昼休みに俺の所に来い！！」

昼休みを失いうなだれる僕に軽く首をこっちに向けた綾はドンマイと口パクで言っていた

（はあー僕の昼休みが……）

そして時は過ぎ昼休み

四時間目が終わり僕はすぐさま立ち上がる

「あ、つな君行くんだね」

「そりゃ呼ばれたら行くでしょ」

「そんな固いこと言わないで、いつも通り私と山神君で昼ごはん食べに行こうよ」

「今日ばかりは勘弁」

両手を合わせて、ごめんと謝り、僕は職員室へと歩いて行った

—職員室—

「さーて、罰のリクエストはあるか+

「できればしんどくないものがいいです……」

「じゃあお前は放課後魔法科の中庭の清掃活動だ」

「げっ、勘弁してくださいよ先生、俺は普通科の生徒ですよ、魔法科には関わるわけには……」

「つべこべ言うな、とりあえず決定だ、さっさと教室に戻れ」

職員室を出た教室に戻ると心配した綾と焰がいた

「「どうだった剣士（つな君）？」」

「アウトだったよ……放課後魔法科の中庭で清掃活動だったさ」

僕がそう言つと、二人は強烈に嫌な顔をしていた

「清掃活動でも嫌なのに魔法科ときたか」

「私だつたら魔法科だけでも勘弁してもらつよ」

何故こんなにも魔法科が嫌がるかは放課後になれば分かること

だが、普通科の生徒は魔法科を毛嫌いしていることは間違いない（

伊場　　隼は例外）

「まあそんなことより昼ごはん食べに行こうよ、つな君待ってたんだから」

そう言う綾の手には弁当箱が握られていた

「わざわざ待っててくれたんだ、ありがとう」

僕達はそれぞれ自分の昼ごはんを持って教室を出て、中庭へと向かった。

較差

中庭にはすでに普通科の生徒が多く昼食をとっていた

できるだけ空いている場所に座った三人はそれぞれの昼食を食べ始める

「にしても授業中にうたた寝しただけで、清掃活動は酷いよな」

「どうせ点数稼ぎだろ、最近何かにつけて清掃活動させてるそうだし」

「何それ！！酷すぎだよ！！」

僕達が言う点数稼ぎとは、おべっかみたいなもので、この学園では魔法科の先生が圧倒的に権限があるため、普通科の先生は何かで魔法科に役立ちたいと思っている

「まったく、魔法科は社長で俺たちは平かよ」

そう焰が呟いた時だった

「よく分かってるじゃねえか凡人共」

（魔法科の生徒……三人か）

「何だよ、魔法科の生徒が普通科の中庭に来るなんてどうしたんだよ」

「おい、口の聞き方に気を付ける」

魔法科の生徒の蹴りが焰の弁当を吹き飛ばした

「てめえ、いきなり来て何しやがんだよ!!」

「あ？何だその態度は今すぐ病院ベッドに行きたいのか？」

「やれるもんならやってみやがれ」

二人は完全にヒートアップしていて、中庭にいた普通科の生徒は散り散りに帰っている

「どうせ、やる勇気もねえんだろイモ虫野郎が」

「そんなに死にたいなら今すぐ殺してやるよ!!」

焰の言葉で完全にキレた魔法科の生徒は焰に能力を使おうとしていた

「ちょ、ちょっと待って山神君、魔法科のあなたも能力を使うのはマズイよ」

二人の間に綾が割って入る

綾が入ったことで、魔法科の生徒もギリギリの所でストップした

そして綾を見た魔法科の生徒はお目当ての品を見つけたかのようにニヤリと笑った

「中岡 綾、俺は君を探しに来たんだ」

「へ、私!？」

「中岡 綾、俺と付き合え」

「……………へ？」

「俺達魔法科の喫茶店に行こう」

無理矢理綾の腕を引っ張って連れ出そうとするが、その腕を僕はしっかりと握っていた

「何だお前？」

「つな君」

「止めといた方がいいぜ、あっちを見てみ」

指差した方向から、魔法科の生徒が走って来ていた

その生徒の胸元には風紀と書かれたバッチがつけられていた

「風紀委員です、今すぐ能力発動を止めないと、実力行使で止めさせてもらいます」

風紀委員のおかげで、何とか一触即発ムードを脱することができた
一悶着後、教室に戻った三人は教室に入ったとたんに全員から拍手で迎えられる

「焔、魔法科の生徒によくやったな」

「綾ちゃん、災難だったね、クズ男に告白されるなんてね」

「十君も魔法科から綾ちゃんを守ったそうじゃない」

「守ったなんてそんな大それたもんじゃないよ、たまたま風紀委員に助けられたようなもんさ」

昼休みの出来事が早くも普通科では話題になっていて、その話題でその日は持ちきりだった

――中庭――

今日のペナルティで魔法科の中庭に来た僕は、せっせと清掃活動に勤しんでいた

「くうー、やっぱ気になるなー」

僕が言ってるのは、魔法科の教室から魔法科の生徒に白い目で見られることだった

たった一人を除いて生徒全員が蔑むような目で僕を見ていた………
そう、たった一人を除いては

「君はこんな所で何をしてるんだい？ここは魔法科の筈だけど？」

「授業中寝てた罰で、清掃活動に勤しんでるんです」

「ふむふむ、つまり最近普通科の教員で流行ってる点稼ぎか」

「へえー、そちらにも伝わってるんですね」

皮肉をこめるような言い方で相手の感情をさかなでたつめりだったが

「君も大変だろ、僕から普通科の教員に言っておくよこのペナルティは普通科の生徒にとって耐え難い苦痛でしかないよね」

魔法科の生徒は顔色一つ変えようとせず、むしろこちらを氣遣うように心配そうな目で僕を見てきた

「後は僕に任せておいていいから、君は帰っても構わないよ」

「……………」

そう言われた僕は、軽く礼をすると、魔法科の中庭から立ち去ろうとしたが、相手は僕を呼び止めた

「ちなみに、君の名前は何て言うんだい？」

「十 剣士」

「変わった名前だね」

「僕ほどじゃないと思いますよ、エースの伊場 臈様」

最後の最後まで相手を皮肉った僕は、エースが次の言葉を言う前にその場をあとにした

緊急事態に見舞われたものの、エースの登場に予想より早く終わった僕は部活に所属してないため、校内に寄らずに校門を出た。

校門を出た後、携帯を開き時間を確認すると、4時30分と表示されていた。

（結構時間がかかっちゃったかな）

現在の時間をがっかりするにはそれなりの理由があつてのことだ。開いてた携帯を閉じ、緩めに歩いていたスピードを軽い駆け足程度に上げる。

そしてその足で着いたの場所はどえらく古びた昔っばさを残した家だった

そさくさと挨拶もなしに家に入り玄関に上がろうとし、靴を脱ぐために下を向いていると

「こら！！遅刻だよ遅刻」

「ごめん、ごめん、あまりにも緊急だったから連絡ができなかったんだよ」

「剣君の用意は私がしといたから早く行つて」

「ありがとな春」

僕が春と呼んだ少女の頭を撫でた

「てへへ／＼じゃあ待ってるね」

喜びながら春と呼ばれた少女は小走りに何処かへ走って行った

僕は春と逆の方向に歩いて行って、一つの部屋に入るとこじんまりとした部屋に胴着と袴が掛けられていて、胴着には黒字で袴では白字書かれていた

“ 風間道場 十 剣士 ” と書かれていた

その胴着に袖を通した後、袴を着てから、部屋にある扉を開けると、その扉の先は道場へ繋がっていた

「失礼します!!」

道場の外にまで漏れるんじゃないかとおもわれる声で挨拶をした

入った後に正座で礼をしてから壁に嵌め込み式のタンスに持っていた鍵でロックを解除する

そしてその段から取り出した物は紛れもない本物の真剣であった。

「珍しく遅かったな十」

「すみません先生に捕まってしまいました」

「そうか、まあ始めようか冬花!!」

冬花と呼ばれた少女は僕とは逆方向で正座していて、その場で立ち上がり、僕の真ん前に来る

「今日こそ私が勝つからね剣士」

「その台詞は聞きあきたよ冬花」

お互い鞘から剣を抜くのが合図となったのか、お互いが斬りかかった

風間道場

道場内では金属と金属がぶつかり合う音がしている

「せいっ！！」

冬花が縦に降り下ろすが、僕はそれを簡単に防ぐ

「おっと、太刀筋が甘すぎるぜ冬花」

つばぜり合いになるが、刀を振り払って冬花と距離をとる

一般人が見れば、殺し合いでもなんでもないやり取りを僕と冬花はやっている

一歩間違えたら、あの世行きの切符が間違いなく手に入ることを普通にやっていた

何故に僕がこんな危険なことをしているかを説明するにはまた別の話で

とりあえず僕は真剣を扱う風間道場に通っていて、自分でいうのもなんだが、かなり強い方と思っている

思っているというのは、現在風間道場に通う人は30人ほどで、その30人は竹刀で剣道をやりに来ている人達だ

剣道道場が風間道場の表で裏では真剣を使って、命を落としかねないことをやっていて、その裏の人数が僕と冬花と師範の風間 玄

十朗の三人だった。

「せやあー!!」

「だから太刀筋が甘えよ!!」

冬花の剣を弾き、真剣を冬花の喉元に突きつけると

「そこまで!!」

師範の止めの声がしたため、僕は真剣を引いて鞘に納めた

「くうー、やっぱ剣士には勝てないか」

「僕から剣術をとったら何もなくなるだろ」

「それもそうだね」

お互い真剣を鞘に納めて師範に真剣を渡す、その一行程を終えて今日の訓練は終わった

終わった後、着替えのために部屋に師範と一緒に入る

「十よ、今日で冬花と何回戦ったのだ？」

「えーと……確か今日で3256連勝になりますね」

苦笑いを浮かべながら師範に言う

「ははは、それは冬花もさぞかし悔しいだろうな」

「そうですね、行く度に剣の腕が上がってますからね、僕も油断してたらすぐ追い抜かれちゃいますね」

「お前を冬花が抜かすなんざ何年後の話だと思っがな」

「こりゃ、手厳しい一言ですね」

また僕は苦笑いを浮かべていた

「そうだと、今日知り合いから美味しい肉をもらったから今日はご馳走だぞ」

「マジすか！？ありがとうございます」

僕は風間道場に通う日の晩ごはんは風間家でいつもご馳走になるのだ

「だと分かったら、一つ風呂浴びてこい」

「はい、じゃあ失礼します」

部屋から出た僕を待ってたかのように、部屋の前には春が着替えを持っていた

部屋の前で待っていた春は僕に着替えを手渡す

「はい、着替えもってきたよ剣君」

「いつもありがとな春」

玄関の時のように頭を軽く撫でる

「てへへ／＼あ、剣君、今日美味しいお肉をもらったんだ、だから楽しみに待っててね♪」

「うん、春の料理を楽しみに待ってるよ」

風間家の料理番の春はとととと台所に向かい、僕は風呂場へと向かった

――風呂場――

「ふー、いつ見ても広いよなここは……」

ここ風間家の風呂はマジでデカイのだ、例えるなら修学旅行の時の風呂で、びっくりするくらいにデカイ

汗をかいた服を脱いだ僕は、衣服を籠に入れ、タオル片手に風呂場の扉を開けて一歩踏み入れると、そこには冬花がいた

「へ？剣士？」

「え！？と、冬花！！」

現在の状況

風間 冬花

装備品なし、入浴中

十 剣士

装備品：タオルのみ（しかも手に装備）、裸で仁王立ち中
状況を理解した僕だが、なぜ体が動かない

そして冬花は顔を真っ赤にして、今にも叫びそうだ

「……………（汗）（汗）（汗）」

「きゃあああああ!!」

「し、失礼しました!!」

とてつもない速さで風呂場を飛び出て、扉を閉めて背を向けた

「剣君、今冬姉の悲鳴が聞こえたけど……………」

「は、春!？」

「……………」

（何てこった……………）

さっきのリフレイン

―居間―

「……………（×3）」

「どうしたんだ三人とも、珍しく無言じゃないか」

「まあ、いろいろありまして……」

お茶を濁そうとする僕に冬花がかみつく

「ちょっと剣士！！いろいろって何よ、こっちは裸見られてんのよ！！」

「だから湯気で見えなかったって言ってるだろ」

「け、剣君！！それは湯気さえなければ見たってこと？」

「違う、扉を開けたら勝手に視界に入ってくる物はどうしようもないって言ってるんだ！！てか、そういう冬花も見ただろ」

僕がそう言つと、冬花は顔をこの世では表せない赤色に染めていた

「はーん、どうやら風間　冬花さんは見たらしいな」

「う、うるさい！！私も湯気で見えなかったわよ」

「え！？じゃあ剣君の見たのは私だけ」

何故か嬉しそうにする春だが僕はスルーする

「おい、いい加減にしろ！！近所迷惑だろ！！」

「何よお父さん！！娘が裸見られてんのに何落ち着いてるのよ」

「小さい頃はよく一緒に入ってたじゃないか」

「今は今でしょ、私だって成長してるんだから」

そう言ってチラッと僕を見る冬花だが

「剣君、取ってあげるね」

「悪いな春」

「うつん、気にしないで」

「……………」

ここいらで風間家の人物紹介

風間 玄十郎：現在の風間家の当主である、少し白髪が混じった黒髪でザンギリ頭、剣の腕はかなりのもので、表向きは剣道場を開いている

風間 冬花：風間家の長女、黒髪のミディアムヘア、僕と同じで真剣を扱う剣術を学んでいる、家事は全般的に不得意である、実は僕と同じ中立魔法学園で魔法科通っている

風間 春美：風間家の次女黒髪のツインテール、僕は春と呼んでいる、剣術は学んでいない、家事が全般的に得意で、家事は全て春がやっている、冬花と同じで中立魔法学園の魔法科に通っている

魔法科の生徒が嫌いな僕だが、この二人だけは特別だった

「ふー、食った、食った」

「お粗末様でした」

「にしてもよく食べるわね」

「こんな美味しい肉食えないからね、食えるときに食べとかないとね」

テーブルに並べられた料理は全て綺麗にたいらげた僕たちは、胃袋休憩タイムのため、ふとテレビをニュース番組に変えた

いつも通りのテンションを変えることなく、ただニュースを伝えている中、ひとつ気になるニュースがあった

ニュースの内容は傷害事件らしく、三人の人が襲われたらしく、これで四件目らしい

「ん？この事件の場所は中立魔法学園の近くじゃねえか」

「ホントだ物騒で怖いね」

ニュースは最後に僕たちの気になることを言った

「警察はどうやら犯行は能力者によるものと考えで操作を進めるら」

「剣士………」

冬花が振り向くと、顔をうつ向けたまま、テレビをきった剣士がいた

「俺、そろそろ帰るわ」

「あ、じゃあ私送ってくよ」

「女の子に送られるなんてまっぴらごめんだよ」

春を止めた僕はゆっくりと立ち上がった

「今日はごちそうさん」

居間にいる二人にそう伝えてから、風間家をあとにした。

通り魔

現在の時刻は夜の9時、辺りはだいぶ暗くなっていた

「……………だいぶ暗いな」

僕が歩いているのはまったく人気のない道だ

その人気のない道をただただ歩き、そしていきなり立ち止まる

「……………出てきたらどうだい」

「ふん、気付いていたのか、さすが我が学園のエースの伊場 臃」

僕の目の前に現れたのは上から下まで黒で統一された服を来た人が4、5人がいた

「そうだが、君達は何者だい？」

「世直し組だ……………」

「ふむふむ、つまり最近有名の通り魔ということかな、これは手間がはぶけた」

「その余裕いつまで続くだろうな」

微かに見える口元はにやりと笑っている

「悪いけど、世直し組には武力行使が許されているんだ、引きずっ

「それでも交番に行くよ」

「ちっ、相変わらず気に入らないんだよ、その態度といい、その余裕も」

「すまない、こういう性分なんでね、さあ戦うならその廃工場にしようか」

「くくく、いいぜ」

男達と僕は一緒に僕が指差した廃工場に向かって歩いた

そして廃工場に入ると、廃工場には男達と同じ格好をした男達が5人いた

「……………」

「俺達だけとは言ってないぜ、どおした怖くて黙るか」

けらけらと、イラつく笑い声を上げる男達に対し僕は軽いため息を吐いた

「いや、この程度の人数と思ったら、運ぶのに時間がかかると思ってたね」

「くっ、エースだからって調子に乗るなあ、かかれえええ!!」

5人が襲いかかり、残りがその場に残り、何かを飛ばしてくる

「ふむふむ、5人が近接系で残りが遠距離系ね」

僕は相手の軽い分析を終えると、片手をおもいつきり振り、片手に剣を出した

「剣なんぞ、俺達だって持ってたんだよ」

5人中の数人が剣を取り出し、襲いかかるが軽く剣で流し、残りが格闘技で応戦すが、それらも簡単にかわし、飛んできた魔力を込めた球を全て剣で切り裂いた

「この程度かな」

「まさか」

「っ!？」

切った球が光り、その球が目眩ましの閃光玉と理解するのは遅かった

「今だ!! かかれえええ!!」

一斉に光の中心に近接系の者も一斉に魔力を込めた球を撃ち込まれ、土煙が舞い上がった。

「はははは、これではエースもさすがに……」

「さすがに何かな？」

「っ!!!!!」

土煙が舞い上がっている場所からかけ離れた場所にいた

「ちっ、撃ち込め!!」

「同じ手は効かないよ」

四方八方から飛び交う球体を今度は剣で切らずに全てをかわしていく
すいすいと全てを紙一重でかわしていく姿は、球体の全てが見える
ようだった

「くっそ、空からも撃ち込んだ!!」

廃工場の屋根に上がっていた数人が撃ち込んで来た球を地を強く蹴
り全てをかわした

「甘すぎるよ」

「どっちがだ？」

屈託のない笑みを浮かべた男が右手を上げると、十人程がぶつぶつ
と何かを詠唱し始めた

「空中じゃ避けられねえだろ」

「しまっ……」

「シューティングスター!!」

空中に魔方阵のようなものが出現し、そこから無数の物質が降り注ぐ

「ぐああああ！！」

降り注ぐ物質を剣で捌くが数が数だった

男達が放ったシューティングスターで土煙が舞い、その土煙が引いた所には片膝をついた朧がいた

「く……………まずい、ダメージをもらいすぎた」

ふらふらになりながらも立ち上がった

それを見た男達は、勝ち誇ってたように笑っていた

「エースともあろう奴がこんな無様だとはな」

まだふらふらで立っているだけの僕に対してトドメをさそうと遠距離攻撃を構える

（くっ……………ここまでか）

その時の僕は本当にやられると思っていた……………彼が現れるまでは

「随分と楽しそうだな」

声の発信元に僕と男達の視線が集まる

声の発信元は廃工場の入口に立っていて、月が雲で隠れていて、その雲から月が次第に顔を出し、立っていた者を照らし出した。

「なっ！？君は……………」

「よお、えらくはしゃいでじゃねえか」

「十……………剣士」

「お前は、中岡 綾といた男！！」

「そういうお前は力で綾を無理矢理彼女にしようとしたクズ野郎じゃねえか」

彼の言葉が勘にさわったのか男達は遠距離攻撃の標準を彼にあわせる

「あ、危ない！！」

僕の叫びは男達の遠距離攻撃が地面に直撃する音によってかき消した

「ふ、雑魚が……………」

「そ、そんな……………」

衝撃的事土煙が舞っている所をただただ見ていた。

どう見ても彼にとっては絶望的と見えていたが

「大丈夫かエース？」

「なっ！？えっ！？何でここに？」

さきほどまで土煙が舞っていた所にいたはずなのに、彼は僕の隣で立っていた。

そして彼はポケットから一枚のカードを取り出した

「ヒール！」

彼がそう唱えるてカードが光り僕の傷をみるうちに癒していた。

「凄い……」

「立てるか？そして、やれるか？」

「君は一体……」

「俺は右半分やるからエースさんは左半分よろしくな」

僕の質問に答えることなく、彼は数が多い右半分へと走っていった。

反撃開始

右半分にいた男達の中のひとりが俺に向かって言う

「お前、無能力者だよな」

「だったら？」

男を強く睨む俺

「無能力者が能力者にたてつくんじゃねえよ!!」

「やっぱ、能力はクズばかりだ」

男のあまりにも理不尽な言葉に深くため息をついた俺はつづける

「病院送りにされたいか、警察に行きたいか選びな……………10秒以内にな」

その言葉にキレたのか、男は剣を取り出し、走り出す

「なるほど……………病院送りにされたいってわけね」

「死ねえええ!!」

男は思いつきり剣を降り下ろす

「剣筋が冬花より甘えよ……………刹牙!!」

その時の光景はただ俺が男にただ前に向かって走っていくように見えていただろうが、男の動きが止まり、俺が横を通り過ぎるとともにその場に倒れた

「まず一人!!」

異様な雰囲気を感じたのか、男達は一斉に攻撃を繰り出すがつたく当たる気配がない

「まず屋根の奴らから片づけるか」

またポケットから一枚のカードを取り出し上に放り投げた

「テレポート」

俺がそう唱えると、その場所から消え、男達はパニックになる

「ど、どこだ!？」

「真後ろさ……」

屋根の上にいた男達が振り向こうとしたが、時すでに遅し

またもや斜牙で男達を同時にそして全員を倒し、地上にいる残りを倒すために地上に降りる

地上に降りた後、地上にいる残り人数を数える

「1、2、3人か」

屋根の上での出来事に信じられないのか、残りの3人は戦意を喪失していた

「ま、待てよ……な、落ち着いて話し合おうぜ」

「言いたいことはそれだけか？」

腰にさしていた刀に手をそえる

そして帯刀していた刀を振り抜くと同時に3人は同時に後ろにぶっ飛んだ

「飛来刃……」

俺がその技を放つと同時に俺が担当していた敵はすべて倒した。

ふとエースの方を見るとエースが担当していた敵も倒していた。

「よお、そっちも終わったらしいなエースさん」

「君のおかげでね……」

皮肉をたっぷりこめた言い方してみたが、あまり気にした様子もなく、えらく簡単に流されてしまった。

エースは携帯電話を開き、世直し組を引き渡すところに電話していた。

やることもなくなった俺は刀を鞘に戻して帰ろうとした時だった

背後からくる危機感を感じた俺は刀を後ろにやると、金属と金属がぶつかり合う音がし、後ろを振り向くと

そこには剣を降り下ろしているエースがいた

エースの顔はふざけてる用もなくいたって真剣だった。

「おい、てめえいきなり何すんだよ……俺じゃなかったら死んでたぞ!!」

「君は無能力者なのか能力者なのかどっちなんだ？」

「どっちの方が視聴者受けすると思う？」

「僕の質問に答えろ!!」

ギリギリと金属がすれあう音、この音がどちらも力を込めていることがわかる

刀を上手く傾け、エースの攻撃をそらし、できた隙でバックステップで距離をとる

「やりたくはないが、やるってんなら相手になるぜエースさん♪」

「初めて合ったときとずいぶん違うな君は」

一人称が“僕”だったのが、“俺”へと変わっているし、初めて合ったときと違ってペラペラと喋るタイプに変わっているのが、エースにはわからなかった。

「別に二重人格とかそういう訳じゃないんだ、ただこの方が都合がいいからな」

「都合？」

「まあそれはどうでもいいじゃねえか、いま聞いているのはやるのかやらないのかどっちだ？」

「僕が聞いているのは君が能力者がどうかだ」

「質問ばつかされんのは好きじゃないな、まあ今答えんでもじきに分かるさ」

そう言っただけ俺はまたカードを取り出した。

「待て、まだ話は終わっていない」

「じゃあな」

エースの呼び掛けに止まることなく、俺はまたレポートでその場から消えた。

能力者？無能力者？

一夜明けて、学校に行く僕はいつもより足取りが重い、これも全て昨日現れた彼のせいだ。

助けてもらったのは事実だ、しかし問題はその後だ。

刀を取り出して、あろうことか世直し組の半数以上をたつたの5分足らずで倒してしまった。

彼は確かに無能力者で普通科の生徒のはずだ。

「……………」

僕は彼のことを知らなすぎる、あまり気は進まないが、少し彼のことを調べてみる必要がある。

そう決めた僕は未だに重い足取りで中立魔法学園へと向かった。

—普通科—

今日僕が学校に着くと、すでに綾が席に座っていて、僕が教室に入ると、気付いたようで手を振る

僕も軽く手を振り返し、綾の後ろの席に座り、鞆を横に掛けた。

「おはようつな君♪」

「おはよう、今日は成功？それとも失敗？」

僕が綾のやっている意味不明なチャレンジについて聞くと、手を後ろにやり少し残念そうに答える

「えーとね、10回目は次回持ち越しかな」

「そうか、じゃあ危うく今日で21回目を迎えるところだったんだ」

「ぶー、さわな言い方しなくてもいいじゃない」

頬を膨らませと文句をたれれ綾

正直言つて可愛い……

だからこそ周りの男子は僕に殺意の目を向けているのだ。

「あ、でもつな君が私より遅いなんて珍しいね」

「昨日道場に行って、そのまま晩ごはんご馳走になったからね、帰りが11時過ぎてたんだよ」

「へー」

僕が道場の話をすると、綾は急に不機嫌にな顔をする

（あれ？冬花と春美が能力者っていうのが気に入らないかな？綾は嫌ってなかったはずなだけど）

女の子は分かん……

「そう言えば昨日突っかかった能力者、今世間を騒がしてた世直し組だったんだって」

少し肩をびくりとさせる僕

「へ、へー、そうだったんだー」

「何か棒読みなのが気になるな」

「気のせいでしょ」

のらりくらりかわしたとは言いがたいが、何とか綾をかわす中、ワイワイ、ガヤガヤ騒いでいた教室が一気に静まり返る。

空気が一気に凍りつく雰囲気を感じたのか僕と綾も会話をやめ凍りつけた元を探すが、それはすぐに見つかった。

「十 剣士君はいるかな？」

「つ、十君ですか、十君なら……」

「僕ならここにいますけどエース様」

「話がある、昼休みに中庭で待ってるよ」

それだけ言い残すとエースは、すたすたとその場をあとにした

エースが帰った後、凍りついていた教室の空気は少し変わっていた。どのような空気にかわっていたかと言うと、エースが来たことによる女子達の興奮はおさまらず、女子達の熱気

それに、エースという敵わぬ存在が来たことによる男子達の冷たい目による冷氣

これがちょうど教室の半分でぶつかり合っているなか

「ふー、なんとか間に合ったみたいだな」

教室の空気を二分する中、焰が入ってきた。

そして教室に入っの第一声

「何だ、ヒーターでもついてんのかこの教室？」

そして半分教室をまたいだ瞬間

「寒、クーラーでもついてんのかこの教室？」

「タイミングが悪かったな焰」

「一体何があつたんだ？」

能力者（一部は除く）を毛嫌いしている焰に話すのはどうかと思っ
たが、どうせ知れるだろうと思つた僕は焰に話した。

「けっ、よりにもよって、昼休みかよ、昼飯食う時間だつてこと知
つてんのかよ」

「ま、こればかりは昼休みになってみなきやわからないな」

ということでは過ぎ放課後

「待たせてしまいましたかエース様」

「気にすることないよ、さと場所を変えようか」

そさくさと歩き出したエースに連れられたのは普通科のこじんまりとした教室

「こんなところで、何するつもりですか、エース様？」

「そのエース様っていうのやめてくれないか、正直いやなんだ、それと、できれば口調を昨日のように緊張感がない口調にしてくれないか」

「緊張感がないとはずいぶん言い方だな、それに何て呼べばいいんだ？」

「呼び方はエース様以外が好ましいかな」

「まあ、呼び名なんざ後でいいだろ」

お互い向かい合うように椅子に座った俺達

エースは座つてすぐに持っていた封筒を俺に向かって差し出した。

「悪いが君のことは調べさせてもらったよ」

「エースだったらなんでもありつてか？」

「調べたのは悪いと思う、だけど君は普通科に通つてながら君はトポスから刀を取り出したのは紛れもない事実だ」

トポスというのは魔力を別空間として使うことで、その別空間のことをトポスというのだ。

そのトポスは物質を保管しておく所で武器などを保管しておく場合が多い。

僕の言葉で彼は黙り、沈黙の時間が流れたが、先に沈黙を破つたのは彼だった

「仮に俺が能力者だとしたら普通科にいたらダメだってことはないはずだ」

「そうはいかない、君が能力者である以上、魔力を何か悪用されたら困る」

「何を調べて何を調べてないかは知らねえけど、悪用してるような成績かよ？」

確かに彼の言う通り、能力を悪用してるような成績ではないし、問題は起こしていない、起こしてる問題は能力者とのケンカぐらいだ

が、無能力者はこれぐらいのことは起こしているし、数なら山神
焰の方が断然上だ。

「それに俺が能力者だとしても、今更魔法科に入れるとしても入り
たくないな」

「しかし、普通科より魔法科の方が優遇されてるのは君も知ってい
るだろ」

「優遇がどうした！？俺は魔法科のそういう所が気に食わないんだ
よ！！もとは皆同じ人間だろうが！！」

席を立った彼の怒鳴った声に僕ははっとしてしまった。

自分なりに普通科のことは分かっていたつもりだったが気のせいの
ようだ。

彼がゆっくりと座る頃には僕も彼も黙っていた。

コンコン。

「はい、どうぞ」

僕がそう答えると、ドアが開き、少女が一人入ってくる

「伊場君、ここにいたんだ先生が呼んでたよ」

（魔法科のクラスAか）

入ってきた少女の制服と胸元にある校章を見て判断する

普通科と魔法科の大きな違いは制服である

クラスを判断したのは、胸元にある校章の色だ

クラスCは緑、クラスBは青、クラスAは赤色で俺の目の前のエースは銀色に輝いている校章をしている

などと、冷静に現在の状況を判断していると、入ってきた少女が俺を見つけたらしく嫌悪感たつぷりの眼差しを向けてくる。

「何で普通科の人が学園のエースの伊場君と話しているの」

普通ならいつもの口調に戻すところだが、あえてそうはしなかった理由は簡単で目の前にいる少女があまりにも氣にくわなかったからだった。

「それくらいめえの頭で考えやがれ、そのための脳みそだろ」

「な、何よ、何て言い方なの！！育ちの悪さが露呈するわね、さすが普通科の生徒ね」

「は、すぐにムキになって、普通科をけなすてめえも育ちの悪さが露呈してるな」

互いに火花をちらしあう二人

それを見かねたエースはヒートアップする前に口を挟む。

「もうやめないか!!」

その場にいたエースの怒鳴り声に二人は黙る

「こちらから呼んでおいてすまないが、話はまた次の機会に……じやあ行こうか南さん」

エースと南さんと呼ばれた少女が出ていき、部屋には俺一人となった

「……帰るか」

意外に早く終わったため、中庭に焰と綾がいることを願い教室を出た。

教室を出て、中庭に向かうと焰と綾が昼御飯を食べていた

「あ、つな君、終わったんだね」

「まあ色々諸事情があつてね」

「諸事情ねえ、どうせあいつらの諸事情だろ」

舌打ちしながら文句をぶちまけながら飯を食べる

「つな君、昼御飯は？」

「ああちよつとな、用意ができなかったんだ」

「じゃ、じゃあ私のお弁当……食べる？」

頬赤らめながら自分の弁当を突きだす

「おゝいいのかサンキューな」

美味しそうに彩られ、盛られた弁当に食欲が底からわきあがる

「じゃ、じゃあ……………」

「ん？」

急に下を向き、顔をさらに赤らめ、両手をもじもじとさせる

そして箸で適当にエビフライを摘む

「つな君ゝあ、あゝん」

「お、おう／＼／」

エビフライを頬張る

「うーん、美味しいなゝ」

「よ、良かった」

「綾の弁当なんだから綾も食べなよ」

「私はいんだよ、だからつな君、はい、あーん／＼／」

今度はご飯を摘み上げ、口元に持っていた時だった。

僕の真横から頬にパンが直撃し、少しながら首が曲がった。

「痛ええええ、誰だよパン何か投げたのは？」

「文句たれてないで、食べなさいよ、綾ちゃんの弁当を食べつくそうとしたから投げたのよ」

声のした方を見ると、投球した後のフォームをとった冬花と春美がいた

「冬花に春美！！」

「剣君、弁当が作る暇がないなら言ってくれば作るっていつも言ってるのに」

「ごめん、ごめん、今日は偶々なんだよ」

「とりあえず、そのパンあげるから昼飯ならそれを食べなさいよ」

横に落ちた焼きそばパンを拾い上げ袋を開ける

焼きそばのソースのほのかな香りが食欲をそそる

「じゃあお言葉に甘えて遠慮なく」

焼きそばパンにかぶりつく

麺にからみついたソースがめちやくちや美味い

「久しぶり綾ちゃんに焰君」

「確かに久しぶりだな風間、今日はどうしたんだ？」

「ちょっと剣士に用があつてね」

「俺に？」

「これを渡してくれって頼まれてね」

冬花から白い封筒を手渡される

「じゃあね、私はそれだけ渡しにきただけだから」

手を振ってその場を離れていった。

食い違い

南さんに呼ばれた僕が、向かった場所がある

コンコン

「伊場　　隴です」

「どうぞ」

失礼しますと一言言っ、部屋に足を踏み入れる。

「やあ、隴君わざわざすまないね」

「いえ、僕も校長先生にお話がありましたから」

窓の外を見る校長に僕は一枚の資料を机に叩きつける

「これはどうということなんですか？」

僕が叩きつけた資料はこの前起こった事件だった

「どういふこととは何だね？事件を見事に解決したじゃないか、本当に素晴らしいな」

「僕が指摘しているのはそこじゃないです、僕が指摘しているのは僕が一人で倒したということです」

「ん？その通りじゃないのかね」

こちらを向いた校長は初めて知ったかのような驚いた表情をしていたが、それが嘘だとすぐに分かった。

だからこそ、僕は事実を校長に叩きつけてやる

封筒から彼の資料を取り出し、校長に資料を出す

「十 剣士、彼が確かに現場いて、僕は確かに彼に助けられました」
それを出した僕に、校長は再び窓の方を向き、遠くを眺めるようにしてから口を開く

「残念だが、世直し組から一人も十 剣士という名は出なかったよ」

「そんな！？僕は確かに彼に会ったんですよ！！」

「一対多の意見だったら多の意見を信じるのが当たり前だと思うがね」

校長先生の言葉に、僕は何も言い返せなかった。

「……………校長先生の話は何だったんですか？」

「まあ似たような話だからもういいさ、さあ午後の授業が始まる、教室に戻りたまえ」

時計を見ると、予鈴まであと5分だったため、僕は少し急ぎ足で校長室を出て、自分の教室に戻った。

五時間目の休み時間、僕は冬花からもらった封筒の角を指で転がす封筒を指から爪、爪から手の甲、手の甲からまた爪にやり真上に高く弾く

そしてそれを取るために、落ちてくる所に手を合わせるが、封筒は僕の手元に落ちる前に横から伸びてきた手に掴まれて取られた。

「綾、封筒」

指をくいくいと手前に曲げ、返せとモーションをとるが、綾は一向に返そうとしない

それどころか、はさみを取り出して封筒の封を切ろうとしていた。

「だあー、か、返せ!!」

多少強引に封筒を奪い取り、内側の胸ポケットに入れる

「ちえっ、つな君の秘密がわかるどころだったのに」

「そう簡単に秘密を握られるわけにはいかないよ、ていうか、勝手に人の封筒を開けると嫌われるよ」

「もう、『冗談だよ』」

綾は笑っているが、胸ポケに入っている封筒に若干ながら切り込みが入っているのをわかっているのだろうか

まあ封筒の中が第3者に見られなければどうでもいいのだが

「ところでつな君、放課後の予定入ってる？」

「ないよ、今日は道場には行かないし、ペナルティーもないから」

僕がそう言つと、綾はぱあと明るいい顔をした

「じゃあ、今日私の家で晩ごはん食べない？鍋らしいからつな君もどう？」

「うーん、迷惑じゃない？」

「ぜ、全然大丈夫だよ、私の親がそんな親じゃないことはつな君も知ってるでしょ」

「……………」

綾の親御さんを思い浮かべる

確かに綾の親は面倒見がいい、特に僕はよく面倒を見てもらっている

「じゃあ、今日一緒に商店街行こ、食材買ってきてって言われてるし」

「うん、荷物持ちなら任せといて」

「期待してるね、つな君」

ニコツととても可愛らしい笑顔をする綾

そんな綾と会話しているとあらゆる方向から殺意の目が向けられたのは言うまでもないだろう

商店街にて

時は過ぎ放課後

僕は綾と商店街に来ていた。

多くの老舗が並ぶこの商店街は、無能力者達が訪れる場所

中立魔法学園から少し離れた場所に位置する

近くにあるスーパーマーケットの全てが能力者以外立ち入り禁止になっているのだからしょうがない。

まあ、これはこれで商店街内の助け合い精神が出ていいのだけど

僕と綾が初めに来た場所は八百屋で、野菜を吟味中

「長ネギはあるから、白菜に水菜だね」

「白菜は黒い点がついてるものがよくて水菜は青と白のコントラストがはっきりしているものがいいから………これだな」

野菜を持上げ、ざるに入れる

「ほー、兄ちゃん物知りだね、てか綾ちゃんじゃないか」

「ご無沙汰してますおじさん」

「ついに綾ちゃんにも彼氏が出来たか、なかなかのイケメンじゃないか」

ニヤニヤしながら八百屋のおじさんは綾を肘でつつく

つつかれた綾は顔を真っ赤にして、何かを喋っている

そうか、僕が彼氏っていうのを否定したいんだな

そうだな、ここで変な誤解をされたらたまらないよな

よし、ここは男の僕がいかなきゃな

「俺みたいなのが彼氏なわけじゃないじゃないですか」

「つな君……………」

僕の言葉を聞いた綾は、とてつもなくがっかりした表情を浮かべる

そしてやがて綾がすこぶる機嫌が悪くなる

「ふーん、そっかそっかーふーん、そうなんだね十君！」

「え！？何故急に呼び名が変わってるんすか綾さん？」

「別にー、十君だって綾さんって呼んでるじゃないの」

「いや、それはまあノリでってか、もう僕の扱いも変わってませんか！？」

「知らない!!」

プイツとそっぽを向いてすたすたと歩いていく。

それから10分間、綾は僕と間は無言だった

「綾、機嫌なおしてくれよ」

「別に機嫌悪くなんてないもん」

いやいや明らかに機嫌が悪いだろ

一体何で機嫌が悪くなったのだろうか？

等とあれやこれやと悩んでいると僕に綾は急に歩みを止め僕の方を振り向く

「十君、この際聞きますけど、私のことどう思ってるの」

「は!?!何だいきなりどうしたんだ?」

「いいから答えて」

（ん?どう思ってるのってどういうことだ?綾の印象を答えろってことかな）

ぐるぐると頭を回転させる。

（うー、変なこと聞いちゃったよ、内容もそうだけど、タイミング

とかも最悪だよ、でも、これくらいのこと聞かなきゃこの唐変木は気づかないだろうし」

こちらはこちらでテンパってるようだった。

二人の間に変な間が開き、俺は答えた。

「綾は可愛いよ」

「へ!？」

予想外の言葉に驚く

そしてその顔を見た俺は聞こえてないと思った俺はもう一度言う

「だから、綾は可愛いって言ったんだけど」

もう一度言つと、綾は身を乗りだす

「つな君!! も、もう一度言ってください!!」

お、呼び名が戻った

「え!？綾は可愛いよって言ったんだよ」

「そ、そっか、私が可愛いかな／＼えへ／＼」

顔を赤らめながら何度も可愛いという単語をくり返した綾は、スキップをしながら帰り道を進んでいく

少し違和感を感じたが、まあ機嫌が直って何よりだ

商店街での買い物を終えた俺と綾は、綾の家に向うこと15分、綾の家に到着

「ただいま♪」

「おじゃまします〜」

玄関に入って靴を脱ぐと、リビングから威勢のいい声がして、一人の男性が出てくる。

「おお剣士、よく来たな!!」

「お久しぶりです、おじさん、今日はごちそうになります」

「おう、たとえ食うんだな、食材を持ってこい準備するぞ」

「ラジャー!!」

食材を置いて、ブレザーを脱いで、椅子にかけてあったエプロンを取って、ブレザーを椅子にかける。

ワイシャツのネクタイを緩め、袖のボタンを外し肘辺りまで捲る。

最後に、取ったエプロンを着けて準備完了。

膝元の扉を開けて、包丁の持ち手の部分に中指を引っかけ、上に弾いて飛ばす。

落ちてきた包丁を右手で取って、野菜をざくざくと切っていく。

野菜を切り終わると、ざるに入れて、鍋に入れる他の食材の下ごしらえを手際よくこなしていく。

（はぁゝ素敵だな／＼／＼）

ぼぁーと頬赤らめ、僕を見詰める綾

突っ立っている綾だが、別に料理ができないというわけではない、ましてや材料の下ごしらえなので、できないわけではない。

ただ単純に僕が一般的な女子よりできるだけだ。

「よし、終わりっ」と」

下ごしらえが終わり、材料が入ったざるをテーブルまで運ぶ

「さぁ、野郎ども食うぞー!!」

「「「おおー」「」」

勘違い

「ふうく食った食った」

空になった鍋を見ながら、ぽんぽんと腹を叩く。

「にしてもよく食うな剣士は」

「男子ならこれくらいは普通ですって」

空になった鍋を持って、台所に移動し、スポンジに洗剤をつけ、綾と並んで洗い始める。

「洗い物は夫婦に任せて、老いばれは風呂でも入ってきますわ」

「な、な、な、何言ってるのお父さん／＼」

ニヤニヤしながら風呂に向かうおじさんは、ピタリとドアの前で立ち止まり

「剣士、俺は長風呂だからな」

「どういう意味ですか？」

「つ、つな君！？気にしないで、お父さん早く風呂に入って!!」

鬼の形相で睨み、おじさんにこれ以上の発言を許さない

「さあ、つな君ちゃっちゃんと洗い物を済ましちゃおう」

「おう、任せとけ!!」

二人で役割を分担したおかげか、鍋のせいかは分からないが、5分程度で終わった。

「ふー、洗い物も終わったし、帰るとするか」

「え!?!もう帰るのつな君」

「ああ、終わったことだし、明日も学校があることだしな」

エプロンを脱ぎ椅子に掛ける

そして椅子に掛けておいたブレザーを着てから、鞆を取る

それから扉を空けて玄関に向かう途中

「おい剣士、まさか帰るつもりなのか?」

タオルを腰に巻いたおじさんが玄関の前に立つ

体の所々がまだ濡れていて、体からは湯気が出ている

あれ、長風呂だと言ってたはずなのにどうしたんだろ

「おじさん、そんな格好じゃ風邪引きますよ」

「俺のことはどうでもいい、とにかく今日は遅い、だから泊まっていけ」

そういうものの時刻はまだ9時、中学生だってまだ寝てない

「でも、明日の時間割の用意だってしなくちゃいけないし」

「そんなの朝に取りに行けばいいだろう」

「そんな二度手間なこと誰がするんすか、それに泊まるにしても、僕はどこで寝るんすか」

「そんなもん綾の部屋に決まってるだろ」

「な！？何が決まってるだろですか、言ってることわかってるんすか」

度肝抜かれる言葉につい声がデカくなる

そう言うと、おじさんはニヤニヤしながら

「17歳の男女が一つの部屋で寝泊まりするんだろ」

「か、帰らせてもらいます！！」

「バカ、泊まっていけ、そして赤飯を炊かせろ」

「僕に何期待してんですか！！」

「んなもん……………」

「ああー！！言わなくていいですから！！」

飛び付くようにおじさんの口を塞ぐ

「取り合えず僕はかえりますから!!」

俺は飛び出るように玄関から出ていった。

一人暮らし

綾の家から飛び出て、歩くこと15分ほど、俺は自分の家に到着していた。

5階建てのマンションのワンルーム、いわゆる学生用マンションみたいなもんだが、10畳とかなり広い

学生でこんなに広い所に住んでいるなんて思つかも知れないが、もともとここが能力者専用だとしてなら納得する

ちなみにもともと言ったのは、現在では能力者が一人も住んでいないからだ

というか、能力者が住んでいるマンションに無能力者が住んでいいはずがないのだ。

とまあ説明はこれくらいにしておくとしてと

家に戻った後、冬花から受け取った封筒を開け、なかから一枚の紙を取り出した。

三つ折りにされていた紙をバツと広げると一番上の所に

【報告書】

と書かれていた。

昨日のような事件を起こしたら、いつもこんな感じの紙があるとある所

に送られてくるのだ。

ことあるごとに毎度毎度律儀に送ってくるもので、少し困っている。

「ふうー」

一通り目を通した俺は、紙を封筒の中に入れ、ライターの火で手紙を燃やした。

これで手紙を見る人はいなくなった

消し炭をゴミ箱に入れ、クローゼットから着替えを取り出し、バスルームに入る

軽くシャワーを浴び、寝巻きに着替える暖まった体のまま、ベッドに入り込むのだが、机に置いてあった携帯が唸り声を上げる

「もしもし？」

「やあやあ、夜分に失礼十君」

電話から聞こえてきた声に俺は深いため息をつく

「おいおい、開口一番ため息はいけないな、君が私に言う言葉は他にあるはずだ」

「分かってますよ、証言の改竄ありがとうございます」

――証言の改竄

勿論昨日の事件のことだ

詳しく言うならば、昨日の事件の容疑者の証言の部分

さらに絞るなら

現場に俺が居たという証言だ

つまり校長は証言を改竄し、昨日の事件から俺を関係者から外したのだ

「そうそう、感謝の気持ちは持たなきゃね」

「でも、どうしたんですか電話なんて」

いつもは紙だけなのに、今日にかぎって電話をしてくるってことは、何か緊急事態なのだろうか

「伊場君に気づかれてる」

「……………普通っすね」

何かと思えばそんなことか

現場と一緒にいた奴なら証言の改竄に気付くだろう

ましてや一校のエース、書類云々は簡単に見れるだろう

「大丈夫っすよ、現場に俺が居たことを証明することなんて無理ですよ、でも探りを入れるってなら……………」

「物騒な考えは止めたまえ」

電話越しから入る制止の声は、本気で止める声だった。

「分かってますよ、仮にも奴はわが校のエースですもんね」

「……………私が言いたいのはそのじゃない、これ以上君に重荷を背負わせる訳には……………」

ブチッ

電話を置き、校長との会話を強制的に切った。

そして俺は受話器に手を置いたまま小さく呟いた

「もう……………後戻りなんかできやしねえんだよ……………」

そう呟いてから、ベッドに入って寝息を立て始めた。

チュンチュンと小鳥がさえずる朝、んうーと背伸びしながら起きる

「もう朝か……………」

寝惚け眼を擦りつつ、ゆつくりと布団から起き上がる。

のそりのそりと動き出し、食パンをトースターに入れる。

パンが焼いている間に、冷蔵庫から玉子とベーコンを取り出して、フライパンで焼き始める。

フライパンの蓋をしてから、粉コーヒーを淹れて、テーブルに置く。

テレビの電源を付け、コーヒーを一口飲んで少し落ち着くと、丁度よくパンが焼け、フライパンからベーコンと目玉焼きを皿に乗せ、今日の朝食の出来上がりだ。

テーブルに移動し、コーヒーをすすりながらも、朝食にかぶりつく

目の前のテレビはつい最近起きた誘拐事件の報道をしている。

「物騒になったもんだなあ……………あんま言えねえけど」

苦笑いしながら、朝食を平らげ、流し台に言って洗い流す

学校指定の制服に着替える

紺色に赤色のラインが肩から手首まで引かれているブレザーに黒色のズボンの制服だ

鞆を拾い上げ、テレビの電源を消し、部屋にあるあらゆるスイッチが切れているのを確認してから家を出た。

鍵を閉め、ブレザーの内側のポケットに入れる

いつものように通学路を歩く

人通りが少ない道のため、通学、通勤時間でも僕と前方のサラリーマンっぽい人しかない

時計を見たサラリーマンっぽい人は足のを速度を上げる

時間が押しているのだろう

心の中で頑張れよと呟きつつ、サラリーマンっぽい人がすれ違った時

ヒュオ！

一筋の剣閃が僕の前髪を切り裂く

「っ！！！！！」

「ちっ、外したか」

目の前にはすれ違ったばかりのサラリーマンっぽい人がナイフを持っていた。

「何者だお前？」

「今から死ぬ奴にわざわざ自己紹介するとでも？」

「じゃあ、今から自己紹介するか病院送りにされたいか選べな……
10秒以内にな」

朝一の襲撃

俺はトポスから刀を取り出し、腰に差し込んだ

「はっ、死ね!!」

一気にナイフの間合いまで詰めて、素早い斬撃を繰り返してくる
ナイフの軌道読み一つ一つを丁寧にかわしていく

「そんな攻撃じゃ、俺が死ぬのは後何年後だ？」

「はっ、強がんなよ、そういうお前は何一つ反撃できてねえか」

後ろに下がっても一定の距離を保つてくるため、剣閃の嵐は止まらない

戦いにおいて距離とはとても重要だ、その距離が今はナイフの距離は相手が有利

しかし、裏を返せばそれは刀の範囲でもあるのだ

「刹牙!!」

「くっ!!」

バックステップでギリギリ刹牙をかわしたが、それは想定内
すぐさま納刀し、すぐさま振り抜いた。

「吹き飛ばせ！！飛来刃」

「ぐあああ！！」

後ろに吹っ飛ばす敵を追った時だった

ズキィ！！

傷みの違和感が左肩にはしる

俺の左肩には敵のナイフが刺さっていた。

そして刺さると同時に左肩が動かなくなった

（くっ、麻痺毒か）

左肩から徐々に感覚が奪われ、左腕が動かなくなった。

「お前が死ぬのは後3分もいらねえな」

懐から新たなナイフを取り、こちらに近づいて来ている

「どうかな？とも限らないぜ」

まだ動く右手で、ズボンのポケットから一枚のカードを取り出した

「キュア！！」

俺がそう唱えると、体全身が光り、光ると同時に麻痺毒が消える

「ちつ、それがお前の能力か!!」

「いんや、これはあくまでも支給品で俺の能力じゃないさ、さあ、次はこっちの番だぜ」

低く構えたまま、俺は飛び出した

それに反応してか、相手の男は羽織っていたコートから数本のナイフを投げつけてきた

ナイフが俺に直撃する前に俺は素早く抜刀する

「流星!!」

「な、何!!!!」

男が驚くのも無理はない、飛ばしたナイフが俺をそれるようになりすぎたからだ

「残念だったな、刹牙!!」

今度の刹牙は、見事に決まった。

「ぐう……くつそ!! 覚えてろ十剣士!!」

ゆっくりと立ち上がる男だが

「逃がすと思ってるのか?」

「はっ、逃げるさ」

再びコートの中に手を突っ込むと、コートの中から閃光玉を取り出し、下のアスファルトに投げつけた。

視界が瞬く間にまばゆい光に包まる。

そして、光が弱くなる頃にはサラリーマンの野郎はいなくなっていた。

「ちっ、逃がしたか……」

舌打ちをしたあと、トポスに刀をしまい、ふと時刻を見ると、

8時10分を指していた

「……………」

時刻を見たままの状態で硬直し

「遅刻だあー」

と叫ぶ僕だった。

朝一の襲撃（後書き）

あΣ（。D；）

主人公自分が能力者のなこと言ってもた

襲撃後

謎の男からの襲撃後、僕は全力疾走の末、ギリギリ遅刻せずにすんだ。

タッチの差で担任より先に教室に入り、遅刻は免れたものの、くた状態の僕はクラス全員に笑われてしまったのだった。

そして、くたばる様に一時間目を寝て過ごし、今に至る

「ごめんね、つな君」

「へ？どうして綾が謝るの」

開口一番綾に謝られ、きょとんとする僕

「つな君が遅刻したのは昨日、お父さんとの一悶着のせいかなと思つて」

申し訳なさそうにする綾に僕は優しく微笑み、綾の頭を軽くポンポンと手を置く

「そんなわけ訳ないよ、むしろ感謝したいぐらいだよ、久々に楽しい時間を過ごさせてくれてね」

「つな君／＼／」

クラス全員から殺意の目を向けられるが気にしないと

「でもつな君、じゃあ何で遅れたの？」

「うっ……それはだな……」

急に詰まった俺に綾は不信感全開になった。

「つな君、何か隠してるでしょ」

「か、隠してないよ別に」

「怪しいねつな君、白状した方がいいんじゃないのかな？」

何がいいのかさっぱり分らない

「の、喉が渴いたから、飲み物買ってくるよ、じゃあ」

逃げるように立ち上がった僕は休み時間の残りを気にして、足早に教室から出ていった。

教室から出ていった僕は普通科の自動販売機コーナーでジュースを

吟味中

（うーん……アップルにするかエナジードリンクにするか迷うな）

純粹に喉が渴いているためアップルジュースを飲むのもいいが、朝の襲撃の疲れのためのエナジードリンクもいい

などと迷っていると、後ろから

「ちょっと、決めてないなら退いてよ」

「あ、ごめん、ごめん今退くから………」

エナジードリンクのボタンを押して、エナジードリンクを取り出し、後ろに動こうとした時

「「あ！」」

そこにいたのは資料室で会った南だった

「お前はいつしかの育ちの悪い女」

「ちょ、何言ってるのよ、私は別に悪くないわよ、ていうか悪いのはあんたでしょ」

「口うるせえ奴だな、じゃあな」

その場から逃げるように去ろうとした俺だが………

「えー売り切れえ〜」

肩を落とす南の声がし自動販売機を見ると、俺が買ったエナジードリンクが売り切れと表示されていた。

どうやら俺が買ったのが最後だったのだろう

「他の自販機に行けばいいだろう、ていうか何で普通科の自動販売機コーナーにいんだよ」

「このエナジードリンクはここにしかないの」

「そんなに疲れてんのか？」

あまりにも悔しそうな態度をとる南を見て、つい聞いてしまった。

「まあね、Aクラスっても競争が激しいのよ、あんたには分からないだろうけど」

そう言っつて、その場をあとにする南に俺は

「南！受けとれ！！」

パツと投げたエナジードリンクを南がキャッチする

「これどうしたの？」

「悪い、俺が買ったのが最後だったんだ、だからそれはやるよ」

それだけ言っつてから俺は今度こそその場から去っていった。

そしてその場に残る南は、俺から受け取ったエナジードリンクを見つめながら

「何なのよアイツ……」

と小さく呟いていた。

教室に戻った僕が自分の席に座ると、綾が不思議そうな目をしていた。

まるでジュースを買いに行ったのに、ジュースを買わずに戻ってきた人を見るような目だ………というか僕だ

「つな君、ジュースを買いに行ったのに、何でジュースが無いの？」

「ん？その場で飲んできたんだよ」

ありがちなことを言って、適当に誤魔化す

「そんなに喉渴いてたんだ」

「ああ、例えるなら砂漠で飲まず食わずで2日間過ごした感じかな」

「それ、多分死ぬよ」

今度は上手くいかなかったようだ。

「まあ、今は冗談として綾、次の授業って何？」

「現国だよ」

「お休みなさい……………」

「つなぐーーん」

綾の叫びもむなしく、俺は深い眠りについた。

そして時は過ぎ

「つ……………君……………つな……………」

（誰かが僕を呼んでる）

そして体を揺さぶり始める

（んんゝ今は眠すぎるから、絶対に起きないぞ！！）

と決めていたのだが……

「痛っ！！！！」

「へっ！？ごめん、つな君」

怪我していた肩をつつかれ、激痛のあまり目を覚ました。

そして、肩を押さえながら悶絶する

「つな君肩痛いのか？」

心配そうに見る綾に制止する僕だが、そう簡単に綾は止まらない

「嘘、見せてみて」

痛めている方の肩からブレザーを取ると、白いYシャツが真っ赤に染まっていた。

「っ、つな君これ……」

「大丈夫だよ、ちょっと手元が狂って包丁が刺さっただけだよ」

「どう手元が狂ったら、肩に刺さるの！」

少し強めに言った綾にクラスの目が向けられたため、僕は綾を連れて外に出ることにした。

教室から出た僕と綾は昼飯もかねて中庭に出る

焰は空気を察してか、僕達にはついてこなかった。

「それでつな君、肩の怪我はどうしたの？」

「だからこの怪我は……」

またさっきと同じような言い訳をしようとしたが、綾は僕の口に手を当て

今にも泣きそうな顔と声で僕に

「お願いつな君……ちゃんと答えてよ……私、つな君に嫌われるのは嫌だけど、怪我の一つを話せない仲になるのはもっと嫌なの」

「綾………」

こんなにも自分を心配してくれる人がいる。

そしてその心配を裏切ったり嘘を吐くわけにはいかない、だけど僕がやっていることを綾に伝えるべきかせざるか

色々な葛藤が戦った結果

「話すよ……本当のことを、信じてもらえるか分からないけどね」

「ありがとう、つな君」

僕は今日の朝にあつた事件を綾につつみ隠さず話した。

「信じてくれるか分からないけど、これが全部だよ」

「信じるよ……つな君が頑張って話してくれたんだもん」

普通は信じられない話だが、綾は優しく微笑んでくれた。

「やっぱり綾は優しいね」

「そ、そうかな／＼」

「そうだよ、一緒にいるだけで安心するんだよな」

「つ、つ、つ、つな君、それってつまり！」

「えっ!？」

ガツと身を乗り出した綾に若干たじろく

いきなりのことで何が何だか分からない僕

目を輝かせながら、身を乗り出している綾に何を言えば言いのか分からない僕

あれこれと考える僕に

「あんた確か、十 剣士だったよね」

声のした方に振り向くと、そこには休み時間に会った南がいた。

「よお、こんな所で何用だ？」

「あ……いや……特に用が……あるわけじゃないんだけど」

下を見つつ、手を後ろでモジモジさせる南、どうかしたのだろうか。

「んで、何用だ？」

「そ、それは………」

またモジモジし始める南、ほんとにどうしたのだろうか？

「……………これ！」

少し間モジモジした南は、後ろから見覚えのある物をつきだす。

「エナジードリンク？」

「あ、朝のお返しよ、あんたなんかに借りを作りたくなんかないからね」

「まあ、その気高いプライド認めるけどよ、そのエナジードリンクはどこで手に入れたんだ？もう売り切れだったはずだけど」

「そ、それは……」

どことなく口ごもる南

「まさか、コンビニにでも買いに行ったのか」

「違うわよ、そもそもコンビニなんて行ったことがないわよ」

「えっ！？マジかよ」

高校生で未だにコンビニに行ったことがないなんて、信じられない
事実には驚きを隠しきれない

「お前それ嘘だろ！！」

「失礼ね、嘘じゃないわよ、そもそも、何ですけど二十四時間開いてるかが分かんないわよ」

「それ否定したらコンビニじゃなくなるだろ」

「そもそも、物価自体も高いじゃない、もう何のために行くか分からない」

「んなもん、小腹が空いたとか、ジュースが無性に飲みたいときとか、履歴書が必要とか色々だろ」

「小腹が空いたら、作ればいいし、ジュースじゃなくて、水飲めばいいじゃない、あと履歴書が必要なら事前に揃えるのが当たり前なの」

「ったく、だからだな……………」

もはや、論題からそれまくりだが、ヒートアップした俺と南は止まらない

エナジードリンクはどこいったとツツコンでほしいところだが、残念ながら今いるのは綾のみ

当の綾も状況がつかめず一人であたふたとテンパっていて、どうにもこうもできやしない

そんな状況が止まるはずもなく、俺達のバトルは続き、やがて……………

「十君、いつも言ってるはずだね、魔法科との問題は避けてくれと」

「はい………すいません」

僕の目の前にいるのは普通科の先生達

南とのヒートアップしていたところがケンカと勘違いされ、その場に来た魔法科の風紀委員達に連行されたのだ

なんともまあ、めんどくさいことになった。

反論したかったが目の前に風紀委員がいるのでは、何を言っても無駄になる。

しかも下手に動いて、普通科の先生達に迷惑をかけるわけにもいかなかった。

「十 剣士、貴様みたいな普通科の生徒がいるから、俺達魔法科の生徒が苦勞するんだ、それをわかっているのか？」

人を人として見ない風紀委員

これが当たり前の光景だ

今までに見すぎて嫌気等を感じなくなってしまうほどだ。

「はい、反省しております」

内心で特大のため息を吐きつつも、誠意をなるべく伝え、その場をやり過ごしたが、僕は心なしか心にもやもや感のみが残るまま、部屋をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8736p/>

無能力と能力者

2011年8月26日22時42分発行